

連載

実験的教育論 [7]

ナビゲーション付きの
教育をしていないか

まちだそうほう

広島大学大学院教授 町田宗鳳

迷うことの大切さ

最近のクルマは、購入時からカーナビの付いているものが多い。知らない土地でレンタカーを借りても、カーナビが付いていると、迷わずに目的地に行ける。文字通りの「文明の力」であり、じつに便利なものである。

その利点は百も承知だが、私はカーナビが好きになれない。なぜかというところ、カーナビのソフトが少しでも古いとせつかく新しい道ができてくるのになんと遠回りさせられたりすることがあるからである。そんなとき、人間が機械に踊らされているような気になってくる。

もう一つの理由は、この装置のために人間が本来持ち合わせている動物的な直感力を弱めてしまいそうだからである。私は生活の拠点が広島と秋田の二か所にあるので、クルマを二台持っているが、そのどちらにもカーナビはついていない。値段が高いから付けられないという負け惜しみもあるが、カーナビに頼らなくてはならないほど、俺は落ちぶれていないという気概もある。今までいろんな国でクルマを運転してきたが、知らない街を運転して目的地に着けなかったことはない。

もちろん、道に迷わなかったというわけではない。というよりも、大いに迷った。私は決して方向音痴ではないが、アメリカに暮らしているときは、まったく不慣れな道をはることが多く、ときには途方に暮れるような思いをしたこともある。あちらでは道を聞くにも、周囲数十キロメートル、まったく民家がないこともよくある。

日本国内なら地図さえ開けば、おおよその見当がつくものだが、地勢のわからない外国では、そうはいかない。山が見えない大平野では、方向の見当すらつかない。広大な大陸を横切るフリーウェイなんかで一つ出口を間違うと、とんでもなく遠回りをすることになる。

いつかフランスのパリからマルセイユまでレンタカーで移動したことがあるが、あのときは、ずいぶん苦労した。そもそもパリの迷路のような細い道を抜け出て、高速道路に乗る道筋がわからない。大学教師のくせに、恥ずかしながらフランス語がわからない私には、道を尋ねようにも尋ね方がわからない。

さんざん迷いながら高速道路に乗った後も、中途あちこちの田園都市に立ち寄り、中世の香りがする美しい風景を楽しんだ。カーナビがなくとも、言葉がわからなくとも、ちゃんと長距離ドライブを貫徹できたわけだか

ら、人間の勘というのは大したものだ。

道に迷うのが良いと意地を張っているわけではないが、迷うのも悪いことばかりではない。クルマを止めて、地元の人に道を尋ねるうちに、温かい人情に触れることもある。少し寄り道すれば、地元の人しか知らない面白い場所や、旨いものが食べられる店があることを教えてもらったりするかもしれない。地図を読む楽しさもある。

私は三十過ぎに生まれ故郷の京都を離れてから、じつに十二回の引越をしたが、短期間で引越した町の地理に詳しくなりたければ、大いに道に迷うのが最良の方法であることを知った。あちこち迷いながら走りまわっているうちに、町全体の様子やどこにどのような店があるか、すぐ覚えられる。もしこれが出発点と到達点と最短距離で行ける道順を示してくれるカーナビどおりに走っていれば、そのルート以外のことは、いつまでも理解することがないだろう。

私は今でもボストン、フィラデルフィア、ニューヨーク、ワシントン、サンフランシスコ、シンガポールなどだけでなく、北海道、秋田、東京、石川、京都、広島、沖縄なども、大げさにいえば「目をつぶっても」運転で

きると思うが、それはひとえに迷いに迷って車を走らせ
た記憶があるからである。そういう土地に何年かぶりに
戻って、ハンドルを握っても、ちゃんと道を覚えてい
て、自分の体内に埋め込まれている記憶と勘に感心する
ことがある。

考えてみれば、われわれはカーナビなしの人生を歩ん
でいる。ナビゲーション付きで、幸福への最短距離を突
っ走りたいところだが、しょっちゅうあちこちで頭をぶ
つけ、壁に突き当たっている。やらなくてもよいことに
手を出して、痛い目にあい、せっかくのチャンスを見逃
して、後の祭りと言わなければならない。人生の年輪
が刻まれていくといってもよい。

それが人の世というものだ。誰もいらぬ苦勞はしたく
ないが、われわれが貴重なことを学びとるのは、つねに
苦勞の中からである。登山家が本物の登山技術を身に付
けるのは、もう少しで遭難するような恐ろしい目にあっ
たときである。ヨットマンが航海術に熟達するようにな
るのも、大シケにあつて危うく沈没しそうになってから
である。

と同様に、人生もいつも順風満帆では、魂が成長しな
い。もしも、人生カーナビというものがあつて、長い人

生に何のヘマもなく、極楽浄土に直行できるのなら、人
間はいかなくて退屈してしまうかもしれない。幸か不幸
か、神さまはわれわれに人生のカーナビを与えてくれな
かった。だから、われわれは死の床に横たわるその日ま
で、長大なドラマを遅く生き抜くことができるのだ。
たとえそれが、涙なしには語れない人生であろうとも。

ハプニングのない教育は死んだ教育である

人生がそうだというのなら、なぜ学校でカーナビ付き
の教育をしようとするのか、わからない。カーナビのみ
ならず、事故防止用のエアバッグ付きの座席に、チャイ
ルドシートを取り付け、そこにしっかりと子どもを縛り
付けるような教育を幼稚園から大学まで施し続けるか
ら、自己顕示のために成人式に騒ぎを起こすことぐらい
しかできない幼い魂が続出するのである。

どれだけの偏差値があれば、どこそこの大学に進学す
ることができるというのも、典型的カーナビ付きの教育
といえる。だから、多感な若者が受験科目の先生の指導
どおりに、あるいは進学塾のノルマどおりに学習しよう
として、溢れるような想像力を押し殺していくのであ

る。教科書や参考書は、知識を網羅的に提示してくれる一方で、子どものいきいきとしたインスピレーションを殺すという性格も帯びていることを忘れてはならない。

誤解のないように言っておけば、私は受験教育を否定しているわけではない。能力のある生徒に高度な教育の機会が与えられるというのは素晴らしいことだ。問題はそのプロセスなのである。彼らの想像力と創造力を伸ばすような入学試験のあり方を模索しなくてはならない。

安全第一は、道路交通と工事現場だけでよい。失敗のない人生を推奨するような教育をするから、子どもたちは退屈して、不登校や引きこもりになるのである。学校に行っても「まさかこんなことがあるとは！」というような驚きを欠いた教育は、死んだ教育である。

たとえば、先生がメガネを忘れてきて困り果てるのか、慌てて入ってきた教室のドアで頭を打つとかすれば、子どもたちは大いに喜ぶのではないか。それは、そこに日常性を破る意外性があるからである。

そう、意外性のない教育は、すべからずカーナビ付き教育と思っ正しい。子どもたちの直観力と想像力を引き伸ばすためには、指導要領というマニュアルに依存してはダメなのである。彼らが目を輝かせるのは、好奇

心を駆り立てるような出来事に出くわしたときである。

子どもたちが退屈な素振りを見せれば、いっそのこと教科書を閉じて、全員で校庭に飛び出し、木にでも登らせるといい。卒業後、彼らは教室で何を習ったか覚えていなくても、木に登ったことだけは忘れないだろう。

もちろん、そんなことをすれば授業の進行が遅れるかもしれない。ましてや子どもたちがががでもしようものなら、大変なことになる。まず、その報告を受けた校長先生や教頭先生が、真っ青になって飛び出してくるだろう。そして、その出来事を家に帰ってから嬉しそうに語る子どもたちの話を聞いた父兄は、抗議のために徒党をなして学校に押しかけてくるかもしれない。今の学校の先生は、ほんとうに気の毒である。

受け身の秀才は要らない

日本のオモチャは精巧にできているものの、それで戯れる子どもたちが頭を使う余地を与えないようなものが多いが、それは教育についても言えそうだ。教える側が最初から結論を出してしまっていて、子どもたちに自分で問題を追究する余地を与えない。あるいはルールを決

めすぎて、自分で判断する能力を奪いとる。そういうことを学校の先生は、子どもたちに対してやってしまっていないか、一度、立ち止まって考えてみてほしい。逆説的な言い方をすれば、マジメな学校のマジメな先生ほど、人間として大きな罪を犯している。

私はアメリカのアイビーリーグの大学からシンガポール大学に移ったとき、幼いときから権威的教育に馴らされたアジアの秀才の正体が、過剰な「点取り虫」であることを知って愕然とした。政府は教育を通じて、国民から思考力を奪い取ろうとしているのかとまで疑ってしまった。

その後、シンガポールから東京に移動し、いくつかの名門といわれる大学で教鞭をとったが、詰め込み教育を勝ち抜いてきた日本人学生の受け身の姿勢に愕然とした。自己表現力をもぎ取られてしまっているのである。そして今回、東京から広島に引っ越し、学生の覇気のなさに愕然とし、東京と地方の間にも厳然たる格差が存在することを知った。

聞くところによると、地方の国立大学にやってくる学生は、「受け身の秀才」ということである。高校で与えられた課題を忠実にこなし、マジメに先生の言うことを

素直に聞いていたから、国立大学に入れたというわけである。つまり、カーナビ付き教育の賜物として、晴れて地元の秀才となり得たのである。

正直言つて、今の日本をダメにしているのは、そういう「受け身の秀才」にほかならない。卒業後も、定年退職まで役所や企業の間管理職としてマジメにコツコツ働いていくのかもしれない。そういう人間が大勢存在してくれるから、この国の社会制度は無難に維持されているともいえるのだが、教育や行政において抜本的改革にブレーキをかけている人たちも、彼らなのである。功罪相半ばすると言いたいところだが、私人の観点からは、「受け身の秀才」は罪の部分が大きい。

私のように、あくせく働いているうちに五十代半ばになってしまい、自分の能力の限界を知り、しぶしぶ現実を受け入れるようになった、というならまだしも、二十歳前後の若者がなら進取の気象も持たずに、既成の社会構造の中に自分を押し込めようとしているのを見ると、フランシス・フクヤマの「歴史の終り」ならずとも、「日本の終り」を感じてしまう。

私は、そのような「受け身の秀才」を教育するために、わざわざ日本に戻ってきたつもりはない。私が育て

たいのは、「八方破れの非常識人」である。既成の価値観を壊すことに躊躇いのない彼らこそが、新しい文化を創り得るのである。

マニユアルを捨てて教壇に立つ

日本では、小学校から大学までカーナビ付き教育が蔓延している。言うまでもなく、そのカーナビのソフトは文部科学省の規格品であるが、一昔前に作られたものだから、その通りに動いていたら、とんでもない回り道をさせられてしまうかもしれない。

この現状を改めるためには、まず現場の先生の自覚が必要だ。「学校の方針が」とか、「教育委員会の締め付けが」とか言ってお茶を濁す教師がいれば、その人はすでにカーナビ付き教育の犠牲者の一人なのだろう。上位の権威がどのような方針を打ち出そうとも、今日という日に教壇に立っているのは、校長でも教育長でも文部大臣でもなく、アナタなのである。そこで子どもたちを活かすも殺すも、アナタ次第である。

生ものを扱う寿司屋の板さんが、レトルト食品用のレシピを見て料理するわけではない。彼らは自分の経験と勘

だけを頼りに、ねじり鉢巻をして素早く銀シャリを握り、そこに選りすぐりのネタを乗せて、カウンター越しの客をうならせるのである。

教師というのも、若者という生ものを扱う教育的職人芸の世界である。黒板を背にして立つときは、マニユアルを捨てて、ねじり鉢巻をする意気込みで登場してこななくてはならない。でなければ、ネタは死ぬ。

全国的基準値である指導要領というのは、それが忠実に守られることによってではなく、指導の目安として使われたときに、最大の存在意義をもつ。私の「実験的教育論」は、ときに挑発的にも見えるかもしれないが、反体制教育を扇動しているのではなく、日本という国に少しでもよくなつてほしいという真摯な願いのもとに書かれていることを改めて言明しておきたい。